

一寸光陰不可軽

人国記

「伝統的な2人乗りの小型オープンカーを、現代技術でよみがえらせる」。この構想が、マツダのプロジェクトとして正式に承認されたのは昭和61年のことでした。

「ライトウエートスポーツカー」と呼ばれるこのカテゴリーは当時、米国西海岸でMG(英国)やアルファロメオ(イタリア)などの古いオープンカーがわずかに売れていたものの、あくまでも懐古趣味的な存在。オープンカーという特殊な車体が年々厳しくなる安全衝突性能基準をクリアできなくなってきたこともあり、新車の発売はほぼなくなりました。

ただ、このカテゴリーを有望とみる動きは50年代後半からあり、わが社の米国法人から何度も提案がありました。やがて、将来の商品を検討する場でも、取り上げられるようになりまし

島 貴 (62) ⑬

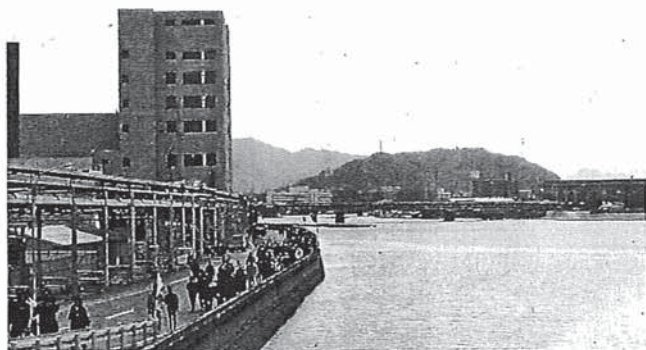
元マツダロードスター主査

た。その検討の場は、構想が「オン」になるか「オフ」に終わるか可能性が五分五分なので「オフライン55」という名称でした。

このクルマの担当主査に名乗りを上げたのが、もともと企画設計部門の人で出向先のディーラーから戻ってきた平井敏彦さん。ディーラー時代にお客さんから「トヨタや日産と同じような車なら、マツダから買う必要がない」と言われたのが忘れられず、「らしさを」と探していた平井さんは「このプロジェクトだ!」と確信したそうです。

平井さんは「人馬一体」をキーワードに掲げ、「駆動形式はエンジンを前に置き後輪を動かすFR、定員は2

オープンカー開発 手挙げる



オープンカー開発の拠点で「リバーサイドホテル」とも呼ばれたデザインセンター

|| 広島県府中町

内では新車の開発が相次ぎ、人練りの余裕はない。平井さんが人探しを始めたことを知り、2代目「サバンナRX-7」の開発をほぼ終えていた私は「オープンカーを手がけられるなんて夢のような話。絶対食いついておかなければ」と手を挙げたんです。

本業の合間や休日、時間外に集う「手弁当」での参加です。でも、物好きたちが徐々に集まり、活気づいてきました。そこで平井さんは、本社の横を流れる川のそばに建つデザインセンター5階の車庫を確保してくれました。車庫なので床はコンクリート、壁の付近にはガードレールが取り付けられていました。メンバ―たちは「リバーサイドホテル」と呼び、気に入ってました。この新車開発には、社内の反対意見や横やりも多かったのですが、隔離されたリバーサイドホテルで黙々と構想を練り上げていったんです。



九州・山口

産経新聞九州・山口版は月ぎめ購読料3000円の朝刊紙です。九州山口地域でも、ご自宅や会社へ配達いたします。申し込みは下記のフリーダイヤルか、専用サイトで。

ニュースのご連絡は九州総局

TEL 092(741)7088 FAX 092(726)2572 kyushu@sankei.co.jp

〒810-0004 福岡市中央区渡辺通5-23-8 サンライトビル3階

山口支局

TEL 083(923)3333 FAX 083(923)3334 yamaguchi@sankei.co.jp

〒753-0074 山口市中央3-6-2

購読のお申し込みは 0120(34)3733 www.sankei9.com

販売のお問い合わせは TEL 092(741)2323

広告のご用は TEL 06(6633)9474